

Simon & Garfunkel Web Forum Off-Line Meeting 2016

**50th Anniversary Of The Album
Parsley, Sage, Rosemary And Thyme !**



MENU 本日のメニュー

(13時開始)

■ こうもり

■ BP&Meva&Kazu

Scarborough Fair, Duncan, The Boy In The Bubble

■ 「元気です」 島田マスター & 高畑さん

April Come She Will, Old Friends/Bookends, Kathy's Song

■ 自己紹介タイム

チアキ、くまさん、裕子、柏木、佐々木、ようこ、うらうめ

■ 大口さん Song For The Asking

■ ばあと 早く家へ帰りたい, 恋人と別れる50の方法ほか

■ 黒ぎたー

So Long, Frank Lloyd Wright, Still Crazy After All These Years

■ こうもり&井手

Mrs.Robinson, America, The Boxer, American Tuneほか

【企画】 1966年のS&Gを巡るよもやま話 Presented by 7th. Ave.

■ S+G

I am a Rock, Train in the Distance, Run that Body Downほか

■ こうもり&けんご

Down In The Willow Garden, Bright Eyes, The Kid

■ Ash

雨に負けぬ花, 霧のブリーカー街, 水曜の朝 午前3時,
レッド・ラバー・ボール, 冬の散歩道

■ クロージング

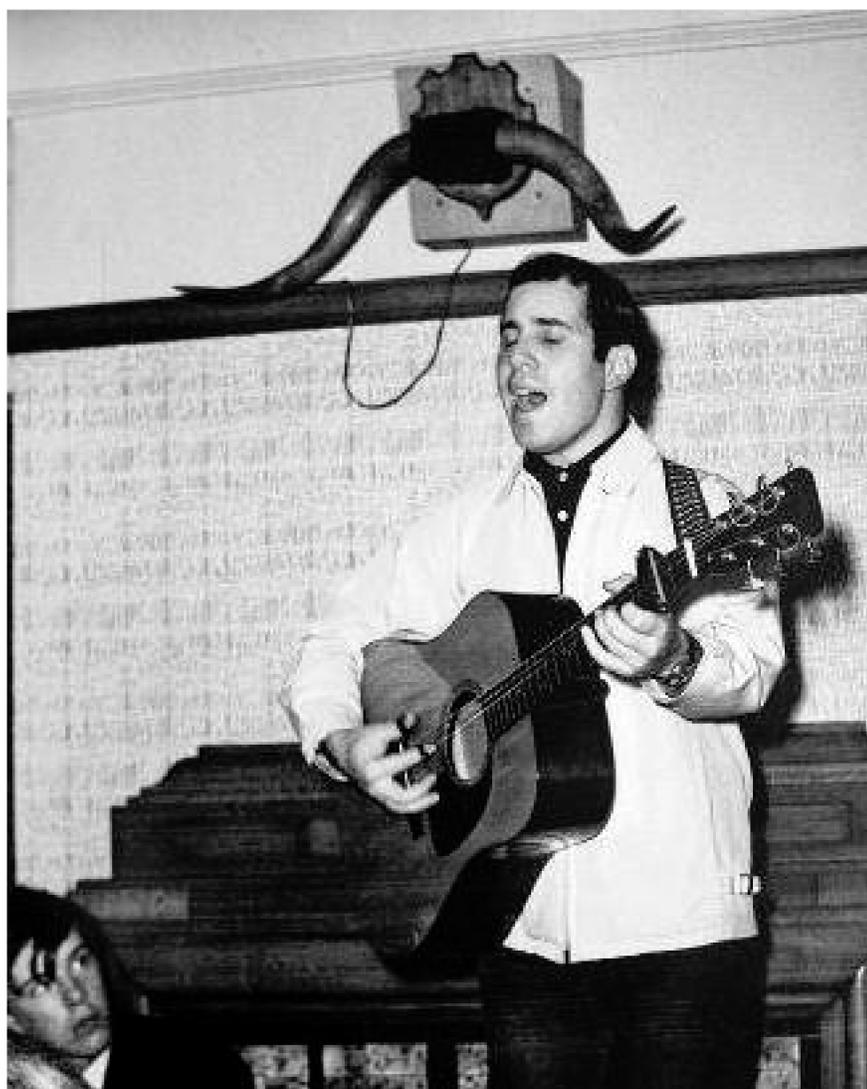
(18時終了予定)

イギリスの「お宝音源」を探して～ Essex Record Office 訪問記

Blank Paper

2016年2月末に、観劇のための一週間ほどの短いロンドン滞在を計画していた。ロンドン市内に宿泊し、注目している当地の演劇上演を短い期間で出来るだけ見ようと考えていた。別々の芝居の昼上演(マチネ)と夜上演(ソワレ)をハシゴして行くわけだが、一日だけ昼の予定が空いていた。

ちょうど、その直前に、7th Avenueさんから、ポールのイギリス時代のライブ音源がEssex Record Officeに保管されている、という情報を教えていただいた。現地のテレビ放送で紹介された動画がYouTubeにアップされていたのだ。それらによると、ポールがイギリスで初めて演奏した場所であり、あのキャシーとも出会ったとされる、Brentwood Folk Club, (Railway Inn) でのポールの演奏の音源がオープンリールテープで残されているというのである。年代としては1964年のものらしい。



その音源は、Brentwoodとはやや離れた町である、Chelmsfordにある、Essex Record Officeに保管されており、一般人であっても、聞くことができるということであった。ネットで調べてみると確かにアーカイブのリストが出てきて、Brentwood Folk Clubの音源らしきものが4つ出てくる。ロンドンからは電車を乗り継げば1時間半程度で行ける距離で、十分日帰りできることから、空いている1日を使って、行って見ることにした。イギリスのこうしたアーカイブにはあらかじめ予約をとらないと入れないところもあるが、特にそれらしきこともウェブサイトには載っていなかったため、ダメ元と思い、ぶっつけで行くことにした。予定の日が金曜日だったのだが、週日のうち、金曜日だけはアーカイブが午後4時で終了、他の日より1時間早い。いかにもイギリスの公的機関らしいやる気のなさ?である。

予定していた2月26日に、宿泊していたロンドン市内のホテルから地下鉄に乗り、途中で中距離列車に乗り換え、Chelmsfordに向かった。ホテルを出たのが午前10時半くらいになってしまったので、Chelmsfordの駅に着いたのがちょうど昼頃だった。見積もったとおり1時間半程度である。特に主立った観光地もない町のため、観光客は見かけない小さな町である。駅からバスに乗り、10分程度のバス停でおり、そこから少し歩く。ロンドン近辺の地方の2月末から3月は比較的天気が多い。この日も、晴れて暖かく歩くのには問題ない日でよかった。町外れの家屋もまばらな、とても辺鄙なところに、Essex Record Officeがあった。Record Officeというと日本語の「レコード」を意識してしまうので、「音」専門のアーカイブなのかと思ってしまうが、Record = 記録、ということであり、Essex地方の地図や文献など、史料を中心に保管し、研究などのために公開している場所、ということで、音源や映像資料はその一部に過ぎないようだ。



入り口から入るとすぐに受付がある。そこでサウンドアーカイブ、特にポール・サイモンの音源を聞きたくて来たことを告げると、IDを求められたのでパスポートを見せる。もう一種類何か住所が証明できるものが必要だということで、日本の運転免許証を見せる。もちろん受付の女性には日本語は読めないが、顔写真が入っていたので、それでよかったらしい。これで入館証が発行された。二階に上がり、ロッカーに荷物を預ける。筆記用具以外の持ち込みは行えない。ここでもう一度、チェックを受けるために少し待たされ、やっと史料室に入れてもらった。今度はカウンターの男性に（リタイアした高齢の方がやっているようだった）同じことを説明し、Brentwood Folk Clubの音源を出してくれるように頼む。

ここで出てくるのは、テープではなくCD-Rに落としたものである。近くにプレイヤーのあるブースがあり、そこに持ち込んで、自分で再生し、付属のヘッドホンで聴くのである。CDは1枚ずつしか出してくれないため、4枚のCDに収められている音源を少しずつ聞いていくことになる。

Brentwood Folk Clubの音源はパート1から4まであり、パート3と4にポールの音源が含まれていた。CDなので両方とも74分程度音源が入っているが、3の中の15分程度、そして4は全てがポールの音源だった。基本的に録音状態はよく、雑音で聞きにくいということは全くない。多少音がつぶれたり、テープのため、速度がおかしいところもあるがほとんど気にならない。ポール以外の出演者もレベルが高い。パート1から聞いていったこともあり、時間がなくてじっくり聞くことができず、早送りしたところも多かったが、パート3には4曲、パート4はすべてポールの音源であり、20曲以上が含まれていた。

しかしポールのオリジナル曲はあまり多くなく、当時のフォークスタンダードだと思われる曲が多かった。〈The Sound of Silence〉は3テイクほど入っていたが、もしかすると2つは同じテイクかも知れない。スタンダード曲も含めて同じ曲が何度も出てくるので、複数のライブ音源（の部分）を一つのアーカイブにまとめているようだ。ライブを最初から最後まで録音している、というのではなく曲のみ録音して編集している感じである。〈The Sound of Silence〉はやはり〈Paul Simon Song Book〉の歌い方で、すべての曲をギター一本のソロで歌っている。録音の加減なのか、なんとなくポールの声質が違うような気もするが、歌い方はやはりポールである。他にオリジナル曲としては、〈Leaves That Are Green〉、〈Northern Line〉を歌っている。〈Northern Line〉はその後歌われなくなってしまったオリジナル曲（別の音源が知られている）で、ロンドン市内の地下鉄の路線名を題名としているのだが、内容としては、混んだ地下鉄に乗り損なって事故で死んでしまう男の話である。しかしこの曲を歌っている間、観客は大受けで、一節歌うごとに笑いが起こっている。Northern Lineはコミックソングとして歌われていたのだった。翌年（1965年）に発売されるアルバム〈Paul Simon Song Book〉に収められる数々のオリジナル曲は、この時点でのライブではまだほとんど歌われていない（あるいはまだ作られてさえいない）のであった。

S&G名義ですでに発売されていたファーストアルバム〈Wednesday Morning 3AM〉（1964年）からの曲は歌っていた。〈You Can Tell The World〉、とBob Dylanのカバーである〈Time, They Are Changing〉の2曲である。後者は曲の最後が切れてしまっていたのだがとても素晴らしい出来栄であり、これらの音源の中で最も印象に残った。



その他、スタンダード曲として確認できたのは〈Bingo〉、Tom Paxtonの〈Goin' To The Zoo〉、Joan Baezの〈Silver Dagger〉、Bob Dylanの〈Man of Constant Sorro〉などである。これらは数テイク入っていたので、頻繁にレパートリーとして歌われていたものと思われる。他にも歌っていたが、この時期のフォークシーンに詳しくないため記憶や、一部メモした歌詞からは特定できなかった。ポールが一部歌詞や曲調を変えて歌っている場合も考えられる。例えば、〈Man of Constant Sorrow〉のディランのオリジナル歌詞〈I'll say goodbye to Colorado Where I was born and partly raised〉のColoradoの部分ポールはNew Yorkに変えて（自分に引きつけて）歌っている。

平日ということもあって（ただし土日は休みだったような…）、サウンドアーカイブのブースを利用してしたのは私一人で（ブース自体は5人利用できる機器があった）妨げられることなく十分集中して聞いたのはよかったが、それでも昼くらいに着いたため、受付や待ち時間も含め、4時間でCD4枚の音源を詳細に確かめるのはやや厳しく、全てをゆっくり聞くことができなかったのが残念である。当然、音源をコピーして持ち帰ることはできないので、聞きたければまた訪れるしかない。機会があればもう一度訪れたいと思う。今後訪問して音源を聞きたいと思われる方は、2種類のピクチャーIDをお持ちになることと、音源CDはパート4だけを貸し出してもらい、じっくり聞き、時間があればパート3の音源も聞くという順番がよいと思う。また閉館時間が通常午後5時とはいえ、冬場は、すでに暗い時間である。お一人で行かれる場合など、町中に戻るまで少し暗い道歩くことになるので、十分注意されて、できれば明るい時間内の来訪をおすすめする。

最後に、この音源の存在を教えていただいた7th Avenueさんに感謝し、レポートを終わりたいと思う。



ペニー・マーシャルの手記 その2

“My Mother Was Nuts” Penny Marshall (P168-9) より抜粋試訳

ようこ

ロンドンで映画のロイヤル試写会に出席した。他の招待客とは一緒になく、私たちは別にホテルをとった。そのホテルでは、アーティがバスタブにお湯を出したままディナーに出てしまった。戻ったら部屋が水浸しになっていた。私たちは四つん這いになって、忌々しいホテルの部屋を掃除して一晩中過ごした。全くラバーン&ガーファンクルといった感じだった。

それからキャリーとポール、アーティと私でポルトガルに旅行した。そこでは濃霧に囲まれて、その霧は一度も晴れなかった。キャリーとポールがお互いの神経を逆撫でし始めたので、アーティと私は逃げ出して、4-5世紀前には修道院だったホテルを見つけた。部屋は狭く、質素で飾り気がなく、閉所恐怖症になりそうな感じだった。何十年もの瞑想と沈黙を守るには最適。アーティはそれが気に入ったが、私は違った。夜遅く、私たちは言い争いになり、ホテルを出ることにした。しかしその修道士かナイトマネージャーか—彼が誰にしろ—がその時間に私たちをチェックアウトさせることはほぼ不可能だった。結局は滑稽なことという結論に達したと思う。



この時、ペニーとアーティの滞在ホテルのバスタブが溢れ続けていたのかもしれない。

アヴィニヨンでバイクを手に入れる頃には私たちは仲直りしていた。コニャックのエリック・アイドルとターニャ・アイドル夫婦の家に向かう途中でバイクが故障し、到着後はどうやって修理したかばかり私は話していた。これもまた、アーティのおかげで得た人生の教訓だ。

わたしたちはまた、フランスの田舎にある辺鄙な村に友人のキャロル・コールドウエルを訪ねた。その村では起きることは二つだけのようだった。朝に羊が群れをなして丘を越え、夜に戻ってくる。羊の首には鈴がつけられていた。私たちは行ったり来たりその音色を素朴なシンフォニーとして聞いた。

キャロルのところを立ち、南に向かってニースに行き、さらにイタリアに入った。国境を越えた時、アーティと私はいくつかの対比に強い印象を受けた。フランスの道路はいかにうまく標示が出ていたか。フランスの田舎の静けさ、比べてのイタリアの騒がしさ、イタリアでは人々はクラクションを鳴らし、叫びあっていた。我々はイタリア人に囲まれたとわかった。

そして一番の景色に出会った。アルプスのグラン・サン・ベルナール峠を登り、スイスへ入った。眺めの荘厳さに触発され、気持ちを抑えることができず、私は突然『サウンド・オブ・ミュージック』の曲を歌いだした。アーティは私がジュリー・アンドリュースではないことを思い出させた。

「歌わないでもらえますか(Please don't sing.)」と彼は言った。
私は気を悪くはしなかった。

ジュネーブでトレイシーと私の姪のウェンディーと落ち合った。彼女たちを空港で拾い、レンタカーを借りて、バイクのバックシートに女の子一人、車に私ともう一人という形で旅を再開した。最近16歳になったこの二人の少女に、フランスの田舎道で私は運転を教えた。アヌシーで16世紀の大聖堂を見つけながら練習できるというのに、サンフェルナンド・バレー(アメリカ)でするってことはないわね。

パリに戻って、道端で昼食をとった。ディナーの席で、アーティは少女たちとハモって歌った。パリでは、彼女たちにノートル・ダム寺院を見せ、セヌ川に沿って散歩した。夢うつつの状態だったが、それが私の生活で、家に戻るときになったら、充電されて準備ができているように感じた。トレイシーは私を冒険好きだと称賛したが、本当のところ、その賛辞に値するのはアーティだった。彼は私に贈り物をしてくれた。旅に目覚めさせ、人生に対する新しいアプローチを教えてくれた。

あとは私次第だ。

撮影者:ペニー・マーシャル



グリーンバーグ&ガーファングルの帰還

The Return of Greenberg and Garfunkel

by Paul Hond / 試訳 ようこ



大学1年時のある日、サンフォード(サンディ)・グリーンバーグはクラスメイトのアーサー・ガーファングルと構内の草の多い区画に立っていた。

「スタンフォード、あそこの芝をご覧ください。色や形や、草の傾き方」

グリーンバーグは心奪われた。他の人はみな女の子やスポーツについて話すのに、アーサーは「芝生」について話したかったのだ！

キャンパスに、グリーンバーグより幸運な者はいただろうか。彼はコロンビア大学から全額支給の奨学金を受けてバッファローからやってきた貧しい男の子で、マーガレット・ミード、レオン・レーダーマン、ジェームズ・シェントン、マーク・バンドーレンから教えを受けていた。そして新たに、クイーンズ出身で澄んだテナーボイスの持ち主である聡明な男の子という素晴らしい友達ができるのだ。

しかし1960年の夏、3年生になる直前に、グリーンバーグの運は傾き始めた。バッファローで野球をしていた時、彼の視覚は「酔ったように」なった。その雲が晴れるまで、彼は草の中に横にならなければならなかった。

医者はアレルギー性結膜炎だろうと言った。

秋に大学に戻ると、グリーンバーグにはさらに色々なことが起きたが、それを誰にも話さなかった。深刻なこととは思わなかったのだ。ただ、ルームメイトであるガーファンクルとジェリー・シュパイアーは、彼が何かトラブルを抱えていると察していた。

期末試験の初日の朝、ガーファンクルはグリーンバーグを大学の体育館へと送り届けた。そこで試験が行われていたのだ。グリーンバーグは9時から答案を書き始めたが、10:30にものが見えなくなった。彼はよろめきながら体育館の前方へと歩いて行き、答案用紙を試験監督に手渡した。

「目が見えないんです」と彼は言った。

試験監督は笑った。「これまで色々おかしい言い訳を聞いてきたけど、こいつは傑作だな」

グリーンバーグはバッファローに戻り、別の診断を受けた。緑内障だった。その冬に医者は彼の眼に手術を施したが、それは功を奏しなかった。グリーンバーグは失明に向かっていった。あまりにも落胆していたので、大学から来る誰の面会も拒絶していた。

しかしガーファンクルはそれでもバッファローにやってきた。

「話したくない」とグリーンバーグは言った。

「スタンフォード、絶対に話さなきゃいけないんだ」とガーファンクルは言った。

ガーファンクルはグリーンバーグにコロンビア大に戻るよう説得し、彼の朗読者になると提案した。1961年9月、グリーンバーグはキャンパスに復帰した。ガーファンクル、シュパイアー、マイケル・ミュケイジー(第81代アメリカ合衆国司法長官)は自分たちの学業から時間を捻出してテキストを読み聞かせ、彼はオールAの成績を収めた。ただ、彼はまだ一人で歩き回ることは躊躇っていて、友人たちの助力に頼っていた。

そんなある日の午後、グリーンバーグとガーファンクルはミッドタウンに出かけた。グリーンバーグがキャンパスに戻る時間になった時、ガーファンクルは約束があって、付き添えないと言いだした。グリーンバーグはパニックを起こした。二人は言い争いとなり、彼をグランドセントラル駅にただ一人残してガーファンクルは立ち去ってしまった。グリーンバーグは混乱してラッシュアワーの混雑をよろよろと進んだ。タイムズスクエア行の列車に乗り、ひとつ乗換え、降りて116丁目とブロードウェイの角(コロンビア大学正門がある)にたどり着いた。門のところで、誰かが彼にぶつかった。

「おっと、すみません」

グリーンバーグはその声を知っていた。アーサーの声だ。グリーンバーグの最初の反応は激怒だった。しかし次の瞬間、自分が何を成し遂げたのか、そして誰がそれを可能にしたのかを悟った。

「実に見事な策略でしたね」とグリーンバーグは語った。「もちろんアーサーは全行程ずっと私と一緒にだったのです」

卒業後、グリーンバーグはコロンビア大学でMBA、ハーヴァード大学でPhDを取得した。恋人のスーと結婚し、ジョンソン大統領のホワイトハウス・フェローとなり、成功した投資家、ビジネスマンとしての道歩んだ。

ガーファンクルはアート・ガーファンクルとなっていた。

2014年、グリーンバーグはその地下鉄の逸話をトークショーホストのチャーリー・ローズに語った。そのすぐ後、『ナショナル・ジオグラフィック』誌の編集長、スーザン・ゴールドバーグが彼に連絡してきた。失明について特集する号を計画しているのだが、彼とガーファンクルでミッドタウンからモーニングサイドまでの道のりを再現してくれないかと依頼した。

旧友たちは承諾した。ひとつには、『ナショナル・ジオグラフィック』の特集の一部が、グリーンバーグの主な動機について光を当ててくれるからだ。2012年、彼はEnd Blindness by 20/20という取組みを始めた。これは目標年において最も成果を達成した個人(あるいは団体)に300万ドルを金貨で支払うというものである。

今年3月、グリーンバーグとガーファンクルはカメラクルーを引き連れて、グランドセントラル駅からモーニングサイドハイツまで進んだ。

ロウ・プラザで、グリーンバーグは微笑んで、ガーファンクルが彼に『わが町』を読み聞かせたことを思い出していた。彼に言わせると、これは彼らにとって「生き方の指南書」だった。この戯曲のメッセージは、人間というものは日々の心配事に囚われて人生の美しさや尊さの価値を理解できないでいるということだ。登場人物のエミリー・ギブズ、死者である彼女は生者を見下ろし、彼らの愚行に嘆息する。「人というものは皆、ただの盲人の集団ね！」

グリーンバーグは違う。彼は全てを見ている。偉大なものから些細なことまで全ての恵みを称えている。彼の家族や友人の愛から、一本の草の葉に流れる露の筋に至るまで。

彼はこう語る。「あなたが話しているのは、世界で一番幸運な男ですよ」

Columbia Magazine summer2016掲載

<http://magazine.columbia.edu/college-walk/summer-2016/old-friends>

バッグの中の不動産

ampm

1. バッグには何が入っているのか

“I’ve got some real estate here in my bag.”

“America” で、「僕」がKathyに語りかける、おなじみのこのフレーズ。
ところで、バッグに入っている”real estate” って、一体、何でしょう？

(1) 「不動産」説

「このカバンの中には、ほんのわずかだけど不動産が入っているのさ」(注1)のようにストレートな和訳が数多く見受けられます。

しかし、読んだ人には意味が分かりません。

(注1) 山本安見「サイモン&ガーファンクル詩集」(シンコーミュージック)

(2) 「金銭」説

「カバンに少しなら、お金を持っているんだぜ」(注2)のように「金銭」とする訳もあります。カバンに入りそうなモノから逆に推測したのかもしれませんが、Paulがあえて「不動産」という単語を用いたことを素直に受け止めれば、何らかの形で不動産に関係するモノがバッグの中に存在したと考えるのが自然ではないでしょうか。

(注2) SONY GIFT PACK SERIES「SIMON AND GARFUNKEL」SOPH25-26付録対訳(訳者不詳)

(3) 「権利書」説

「土地の権利書」とする訳もありますが(注3)、そもそも米国には権利書制度はないようです。
(注4)

(注3) ブログ「リズムの魔にふかれて」2008/1/10「超訳してみた/Simon & Garfunkel “AMERICA”」

<http://ameblo.jp/shaggy-dog/entry-10065087452.html>

(注4) ブログ「まっちゃんのアメ리카、フィリピン不動産投資録」2014/5/1

<http://blogs.yahoo.co.jp/manila1965machang/54680719.html>

(4) 「無資産の比喩」説

上智大学で英文学の教鞭をとられる飯野友幸さんは、「『不動産なら、このバッグの中に入っている』、ということは、身軽であるとともに、金はない、ということ」と解説されています。(注5)。

ありえないことだから全否定である、という解釈だと思います。

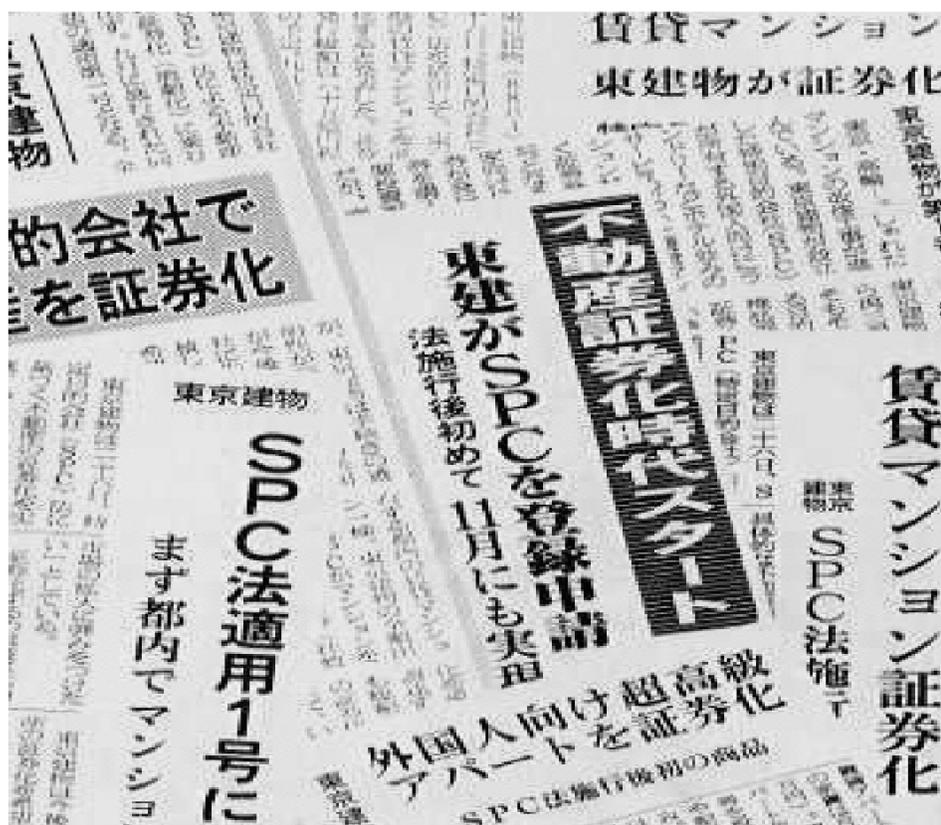
しかしながら、もしそうだとすると「僕らの財産と財産を結婚させるんだ」という直前の言葉が、自分が無資産であることを前提に述べられたことになり、「僕」がやや情けない人間として描かれていることになってしまう点に難があります。

(注5) 飯野友幸 「サイモン&ガーファングルの歌を読む」(NHK出版)

このように、これまでのいずれの解釈も掘り下げが十分とは言えず、納得のいく説明とはいえないのです。

そんな不満を感じ続けて数十年、新聞記事で「不動産の証券化」という言葉を目にして、一つの仮説を思いつきました。

「”real estate” って、不動産投資証券では？」



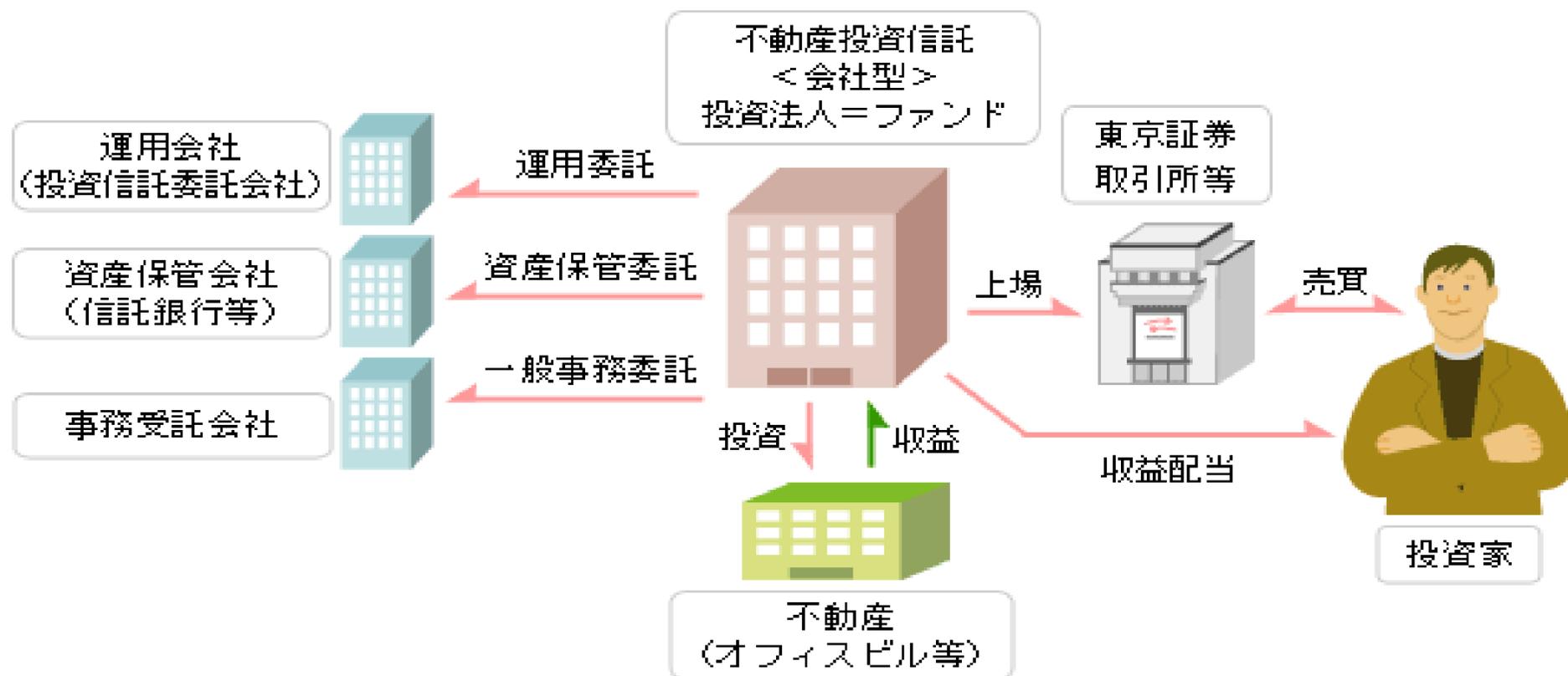
2. 不動産の証券化

不動産の証券化とは、商業用不動産(例えば賃貸ビルやショッピングモール)を、様々な仕組みを用いて小口投資商品(証券)に仕立てることです。

その手法は何通りかありますが、代表格は信託の仕組みを利用したもので、リート(REIT: real estate investment trust、不動産投資信託)と呼ばれます。そしてリートでは、不動産の権利を「リート証券」にして販売します。

日本では、2001年にリートが創設され、今や時価総額約12兆円という金融商品に成長しました。

<リートの仕組み> (マネックス証券HPより)



3. 二つの疑問

「リート証券」説に対しては、すぐに二つの疑問が提示されることでしょう。

一つは、「“America”で描かれる1960年代半ばの米国に、リートがあったのか」という疑問。

もう一つは、「仮にリートがあったとして、『僕』にも買えるくらい身近な投資商品だったのか」というものです。

(1) 米国リートの創設

米国においてリートはいつ創設されたのでしょうか。

調べたところ、1960年9月にthe REIT Actが成立して法制度が整備され、同年、米国における最初のリート“Bradley Real Estate Investors”が設定されていることがわかりました。これが世界で最初のリートです。(注6)

(注6) NAREIT<the National Association of Real Estate Investment Trusts>HP

(2) リートの普及

もしリートが、限られた専門家向けの商品であったり、すごく高額だったとすれば、ヒッチハイクで旅行する若者のカバンに入っているのはふさわしくない気がします。

1) リートの上場

リートの創設からしばらくして、“Continental Mortgage Investors”がニューヨーク証券取引所に初めて上場されました。それは、なんと1965年のこと。(注6)

まさに“America”の舞台として描かれる年代に、誰でもが参画できる不動産投資の手法としてリートが普及し始めています。

この金融市場における一大イノベーションは広く話題になったでしょうから、当然、Paulも知っていたと思われます。

2) リートの価格

では、当時のリートは1口いくらだったのでしょうか。

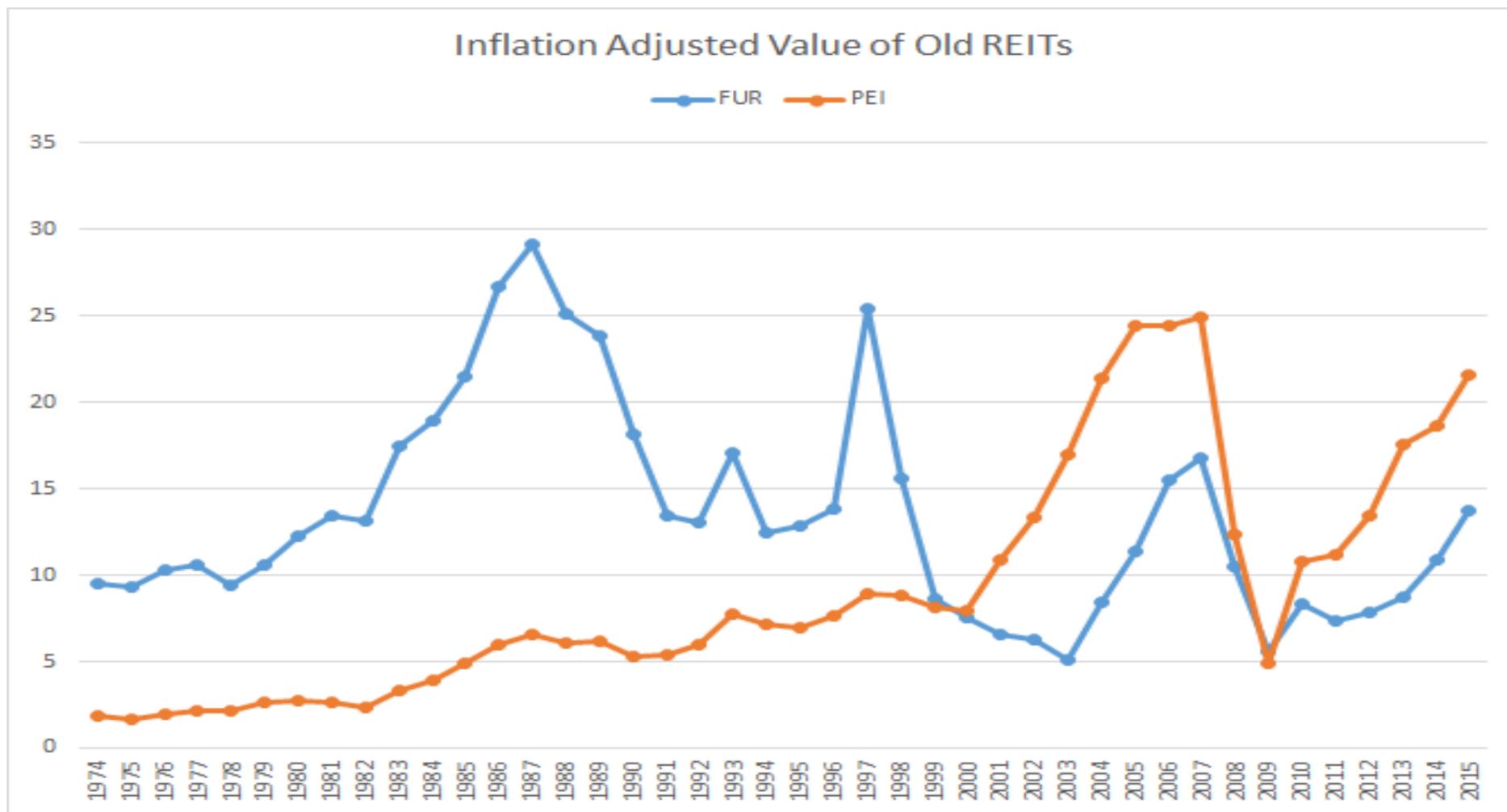
初の上場リート“Continental Mortgage Investors”は現存せず、価格の記録も見当たりませんが、1970年代から今日まで続いている米国リート2銘柄の価格推移が見つかりました。

1974年におけるFUR（First Union Real Estate）は約10ドル、PEI（Pennsylvania REIT）は約2ドル、と庶民にも手が届くお値段。（注7）

したがって、それより前、1960年代半ばのリートも「僕」に買えるくらいの値段だったと思われます。

（注7）1965年当時の1ドル = 360円換算でそれぞれ3600円、720円。

<米国リーートのインフレ率調整後価格推移 単位：ドル（注8）>



（注8） <http://www.freeby50.com/2016/03/performance-of-couple-old-reits-versus.html>、2016/3/3

このグラフは、インフレ率調整後価格なので実際の価格とはズレがあります。

4. 結び

以上見たように、「バッグの中の不動産＝リート証券」という解釈は成り立ち得るようです。そして、もしそうだとすれば、Paulは、時代の最先端を行く財テク商品をバッグに入れることで、「僕」という人間を

- ・蓄財を重んじ、
- ・進取の気性に富んでいて、
- ・複雑な金融商品を理解するインテリジェンスの持ち主

として描こうとしたのではないのでしょうか。（Paul Simonその人、ですね。）

こう考えると、「ちょっとした不動産をこのバッグに入れてるんだ。」とあえて真顔で告げる「僕」と、それを聞いて「？」と目を丸くするKathy（当時、英国にリートはありませんでした。）の様子が、50年の時を超えて目に浮かんできますね。

<米国リート証券>



おしまい

Rolling Stone誌 新アルバム「ストレンジャー・トゥ ・ストレンジャー」紹介記事

Blankpaper

ポール・サイモンの新アルバム「ストレンジャー・トゥ・ストレンジャー」が2016年6月3日に発売された。以下は、発売日が正式にアナウンスされた同年4月7日付でRolling Stone誌のウェブサイトに掲載された、新アルバムについての紹介記事の試訳である。翻訳許可を得たものではないので、試訳であり禁転載としたい。

その後、大きく報道された「引退示唆」についても、この記事の最後ですでに触れられている。「引退」報道については、一貫して「引退示唆」に過ぎず、「止める」のではなく、「止めることに興味がある」と言っただけ、と本人が、アメリカツアー後のCNNのインタビュー(2016年7月28日)でも繰り返していることを付け加えておく。今後の本人の動向に注目する以外ないだろう。

元記事：

〈Inside Paul Simon's Genre-Bending New Album 'Stranger to Stranger'
Hysterical first single "Wristband" now streaming〉 By Andy Greene April 7, 2016
<http://www.rollingstone.com/music/news/inside-paul-simons-genre-bending-new-album-stranger-to-stranger-20160407>

ポール・サイモンの《ジャンルを捻じ曲げた》新アルバム「ストレンジャー・トゥ・ストレンジャー」の中身 アンディー・グリーン 2016年4月7日

ポール・サイモンはここ5年間を新アルバム「ストレンジャー・トゥ・ストレンジャー」（6月3日発売）を精魂込めて製作するために費やしてきた。自分の過去の最高の仕事に立ち向かおうとするなら、スバ抜けたものを創造しなければならないということを彼自身が知っていたからだ。

「新アルバムについてはたくさんの予測があるだろう。僕は50年間も人々によく聞かれてきたからね。」と彼は言う。「今度のは「グレースランド」みたいなものかな？「僕とフリオ」みたいなものかな？ S&Gみたいな？それとも「ケープマン」？てね。人々の耳を驚かせ、素直な気持ちで聞かせるには、本当に興味深いものを作らなければならないんだ。なぜなら人々は面白くないものについては〈聞く準備〉ができていないからね」。

そうしてたどりついた結果である「ストレンジャー・トゥ・ストレンジャー」は実験的なアルバムだ。ヘビーなエコーとリズムがエレクトロニックなビートと融合する。アフリカの木管楽器や、ペルーの打楽器や、ゴスペル音楽のカルテットや金管楽器やシンセサイザーによってだ。「直前のアルバムと違うものを出そうと決めているわけではないんだ。」と彼は言う「それは僕の癖みたいなものなんだよ」。

イタリア人のエレクトロニック・ダンスミュージック・アーティスト、Clap! Clap!が、〈The Werewolf〉、〈Street Angel〉、〈Wristband〉の三曲にビートを提供している。これらのうち〈Wristband〉についてはすでにストリーミング配信されている。彼ら（サイモンとClap! Clap!）は2011年7月にサイモンがイタリアのミラノでSo Beautiful So Whatツアーのコンサートを行った時に、出会っている。「僕の23歳の息子、エイドリアンは作曲をしているんだけど、彼が僕にClap! Clap!のことを教えてくれたんだ。」とサイモンは言う。「彼はアフリカ音楽のサウンドをサンプリングして、デジタルダンスのグループに乗せるんだ。彼の最新アルバムは傑作だよ。彼は同時に新しくもあり古くもあるサウンドを作るんだ。」

アルバムのほとんどの部分はコネチカットにあるサイモンのホーム・スタジオで、Clap!Clap!とEメールでやりとりしながら、録音されたが、2013年に、セッションは短期間、Montclair State Universityに移動して行われた。そこには、20世紀半ばの音楽理論家、Harry Parchによって考え出された、ユニークでカスタムメイドな楽器、すなわちCloud-Chamber BowlsやChromelodeonといったものが保管されていたのだ。「Parchは1オクターブは12音ではなく43音あると言っていたんだ。」とサイモンは言う。「彼は音楽とは何であるかということについて、全く異なる考えを持っていたため、彼自身のための楽器を作らなければならなかったんだ。それによって、彼は微分音楽の音階で作曲することができるようになった。微分音楽の思想がこのアルバムには浸透しているのさ」。

収録曲の主題は、滑稽なものから悲劇的なものまで広がっている。〈Wristband〉は、ロックスターがリストバンドをしていないことを理由に自分のコンサート会場に入れなくなる、という滑稽な話だ。「実際にあった話じゃないよ」とサイモンは言う。「でもとても多くの人がこういう目にあっているし、僕自身も、バックステージに戻る時に止められて、パスを見せろと言われたことは何回もあるんだ。」

〈The Riverbank〉は、Walter Reed Hospitalに負傷した退役軍人を訪れたことと、2012年にSandy Hook小学校で起こった虐殺事件で、サイモンの知り合いの教師が殺され、葬儀に参列したことから発想して書かれた。明るい方の話題もある。〈Proof of Love〉とインストゥメンタルの〈In The Garden of Edie〉は妻のエディー・ブリケルに捧げられている。

アルバムの最初の曲である〈The Werewolf〉のタイトルは、サイモンと彼のバンドが、ペルーの打楽器であるCajónと手拍子とインドの一弦楽器であるGopichandのサウンドを混ぜ合わせている時に思いついたものだ。彼が（曲のサウンドの）テンポを落としたところ、人間の声で「the werewolf」と言っているように聞こえたということだ。サイモンはそこから思いついて、最終的に人間を全て殺してしまうという死の使いとしての神話的存在、狼人間〈The Werewolf〉についての曲にしたのである。「ほとんどの死亡記事は、混ざり合った批評だ」とサイモンは（この曲で）歌う。「人生は宝くじさ。ほとんどの人が負ける」。

サイモンは彼のキャリアで初めて、曲の登場人物をアルバムの別の曲にも登場させるということをやっている。例えば、〈Street Angel〉のメインの登場人物は、〈In A Parade〉に再び現れる。「一つの曲が終わって、その登場人物が別の曲に現れるというアイデアが面白いな、と思ったんだ。」と彼は言う。「同じ登場人物が（別々の曲に）何回も出てきちゃいけないって規則はないと思うんだよね」。

2曲のギターインストゥメンタル、〈The Clock〉と〈In The Garden of Edie〉はもともと、John Patrick Shanleyの劇、Prodigal Sonのために書かれたもので、この劇は昨年（訳注：実際は2015年ではなく2016年2月）ニューヨーク市の中心部で上演されている。「歌の後に少し空白を入れたくてこれらの曲をアルバムに入れようと決めたんだ」とサイモンは言う。「少しだけ、言葉を聞くことを止められるように、とあってね」。

このアルバムは、81歳のロイ・ハリーとの共同プロデュースとなっている。彼とサイモンとの関係は、1964年のS&Gのオリジナルデモまでさかのぼることができる。彼らは、5枚のS&Gアルバム全てとサイモンのソロデビューアルバム「ポール・サイモン」、および「グレースランド」「リズム・オブ・ザ・セインツ」を共同制作している。「彼は引退していたんだ。けれど、僕はいつも、他の誰よりも、彼と仕事をするのが好きだった。」とサイモンは言う。「彼はいい耳を持っている。彼はProTools（パソコンの音楽編集ソフト）については何も知らなかったの、僕らのプロデューサーであるアンディ・スミスが彼を手伝ったんだ。でも彼が持っている、エコーを作る知識は何者にも変えられなかった」。

サイモンは「ストレンジャー・トゥ・ストレンジャー」をサポートする夏のツアーの後、何の計画もしていないとのことだ。しかし、彼は数年前に始めたエディー・ブリケルとのデュエットアルバム制作に戻りたいとの希望を持っている。「僕らは初めて〈空の巣（子供が育った後の親）〉になったんだ。だから僕らはどこかに旅をしようか、と夢想したりしている。」と彼は言う。「引退も考える。かたちにならない創造的な衝動を持ちながら、12歳の時から続けてきた曲を書くということをやめてしまったら、自分が退屈してしまうか知りたいし、何が起こるのか知りたい。でもわからない。フィリップ・グラスは僕のロール・モデルの一人だけれど、彼はまだ現役だよ。彼は僕に言うんだ。君がやらなかったら、誰がポール・サイモンの曲を書くんだい？ってね。」

≡ **RollingStone** Inside Paul Simon's Genre-Bending New Album 'Stranger to Stranger'

Inside Paul Simon's Genre-Bending New Album 'Stranger to Stranger'

Hysterical first single "Wristband" now streaming



Paul Simon gives us all the details on his new album, 'Stranger to Stranger' and releases the hysterical first single, "Wristband" MYRNA SUAREZ

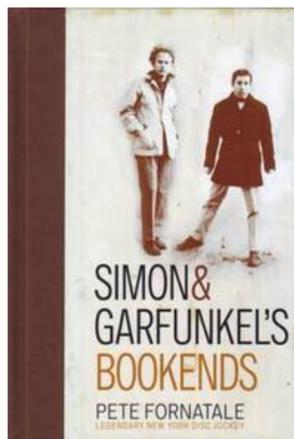
By Andy Greene
April 7, 2016

f t e

了

パセリ、セージ、ローズマリー&タイム

SIMON&GARFUNKEL'S BOOKENDS PETE FORNATALE
4 FORK ROCK P55～



訳：ようこ

すぐ後にリリースされたアルバム『パセリ、セージ、ローズマリー&タイム』の『夢の中の世界(The Dangling Conversation)]』を次のシングルに選んだことはちょっとした判断ミスだった。この曲は、瓦解しつつある関係についてのポール・サイモンのもう一つの断固としたコメンタリーで、詩的なイメージとシリアスな知的懸案事項(「分析には価値がありうるのだろうか? 演劇は本当に死んだのだろうか?」)であふれている。彼らのシングルとしては最も低いチャートで、25位以上には上らなかったし、たった4週間しかチャートインしなかった。アートはポール・ゾロにこう話した。

そう、僕たちは「今や好きなどころに聴衆を連れていけるんじゃないか? バラードをやってみよう」と考えた。なぜならバラードでヒットを出すのは難しいから。ゆっくりなテンポで、本当に理知的、文学的なものをね。皆が気に入ってくれるかどうか見てみよう、そしたら僕たちにはどこへでも聴衆を連れていけることになる。結果としてできないことが分かった。そのレコードはヒットしなかった。2つのカテゴリー、シングルとアルバムカットで曲を考えはじめると、シングルについては、長い、知的なバラードからは遠ざかる方が賢明だと僕たちは知った。

ヒットレコードを出すことの特権の一つはツアーで多くの金を得られることだ(前払いやロイヤリティーに加えて)。彼らのツアーは、ほとんど週末のカレッジでのものだったが、諸経費がこれほど低く抑えられる(声2つ、アコースティックギター1本)場合は財政的に十分見返りのあるものだった。一時的な成功や一発屋ではなく、サイモン&ガーファンクルは60年代の実情を正確に把握していたのだ。彼らは都市型で、頭が良く、洗練されていて、学識があり、野心的で、大好きなロックンロールを心から信じていた。また、10年前に比べて芸術的な表現の潜在力をはるかに大きいことも知っていた。このようなことの真っ最中に、新アルバムへのアイデアが芽吹き始めた。『サウンド・オブ・サイレンス』のような急ごしらえのものではなく、高尚で芸術的なビジョンと野心を備えたものとなるはずである。

『パセリ、セージ、ローズマリー&タイム』の製作は1966年に始まり、約9ヶ月を要した。9月7日に、ポールとアートはスタジオに入り、『パセリ、セージ』には入らないシングルをレコーディングした。『冬の散歩道(A Hazy Shade of Winter)]』というその曲はチャート13位になった。10位以内には食い込めなかったが、その事実10月に『パセリ、セージ、ローズマリー&タイム』がリリースされると、アルバムに対する批評家の称賛と商業的な成功に完全に覆われた。これまでにこのデュオが成し遂げたことを凌駕し、潜在能力のじれったいヒントとともに彼らの数多い才能の驚異的な証拠を提供した。

このアルバムは二人がこれまで作りだしたなかでももっとも美しく、満足のいく曲の一つで幕を開ける。アーティはこう言う。「スカボロー・フェアは僕たちが携わった中で最も自然で優雅、本質的なものだと思う。このトラックに費やした3日間はとにかく大好きなんだ。曲そのものがいかにレコードとして作られていったのかとてもよく覚えている」

また彼は、これがプロセスの他の部分を掌握した時だと感じていた。「僕たちはプロデューサーになったんだ。マイクの前に立つだけじゃなく、ガラスブースの後ろで、ダイヤルに向かって、ロイ・ハリーとミキシングもした。ロイと一緒に、機器類の観点から独自の企てを決定した。本当に、あのアルバムの中では、様々な創造的なことをしたり、広げていったりできた。自分は、あの時に自分たちが作曲と歌を歌うことに加えて、アルバム作りという芸術に入って行ったのだと感じている。

このアルバムには、サイモン&ガーファンクルに人が期待するようになった要素が全て含まれていた。とびきり美しい歌唱とギター演奏(『エミリー、エミリー』); ポップ・カルチャーのターゲットとなっている群衆を狙った痛烈で風刺的な歌詞(『プレジャー・マシーン』と『簡単で散漫な演説』); いたずらっぽい楽観主義(『59番街橋の歌』); 自我についての内省(『パターン』、『雨に負けぬ花』); 聴衆の動きを止めるような、実生活の一断面を映す息をのむような寸描(『地下鉄の壁の歌』、『7時のニュース/きよしこの夜』)

『パセリ、セージ、ローズマリー&タイム』が表現したような知性、美しさ、多様性、創造性、技巧性に及ぶ他者の作品はほとんどない。1966年の終わりごろ、サイモン&ガーファンクルはレコード業界において、芸術的及び商業的な面でさらなる高みへと登る態勢についていた。



Simon & Garfunkel
Web Forum Japan
Off-Line Meeting 2016

<http://www.sandgforum.jp/>